



一般財団法人KODAMA国際教育財団

「第7回（2024年）未来のいしずえ賞」授賞式

2024年2月26日（月） 14:00～16:00

帝国ホテル東京 4階「桜の間」

実施報告書

2024年3月

一般財団法人KODAMA国際教育財団

1. 実施概要

KODAMA国際教育財団「第7回（2024年）未来のいしずえ賞」について

- タイトル 一般財団法人KODAMA国際教育財団
「第7回（2024年）未来のいしずえ賞」授賞式
- 日 時 2024年2月26日（月） 14:00 ～ 16:00 （招待者受付13:30～ ）
- 会 場 帝国ホテル東京 本館4階 桜の間
（東京都千代田区内幸町1-1-1）電話：03-3504-1111
- 主 催 一般財団法人KODAMA国際教育財団、「未来のいしずえ賞」実行委員会
- 招 待 者 主催者含め来場者 70名
- 目的及び開催趣旨
 - 第7回(2024年)「未来のいしずえ賞」の受賞者公式発表、受賞者及び活動を顕彰。
一般財団法人KODAMA国際教育財団の周知と活動紹介
 - 「未来のいしずえ賞」は、未来に向かって豊かな社会の礎を築くために、人知れず努力を重ね、貢献した方々の功績を讃える国際賞です。
より良い社会へと導いていくために強い意志をもって活動している人に授与されます。
本財団は目的に向かって懸命に努力をしてきた方々を顕彰することで、未来への夢と目標を育み、持続可能な社会に貢献してまいります。



第7回未来のいしずえ賞 実行委員会
<実行委員長>
コシノジュンコ（KODAMA国際教育財団 理事、デザイナー JUNKO KOSHINO株式会社）
<実行委員>
児玉 圭司（KODAMA国際教育財団 理事長、株式会社スヴェンソンホールディングス代表取締役会長）
鳥飼 重和（KODAMA国際教育財団 理事、鳥飼総合法律事務所 代表弁護士）
岡山 慶子（KODAMA国際教育財団 理事、株式会社朝日エル会長）



リーフレット

1. 実施概要

一般財団法人KODAMA国際教育財団 「第7回（2024年）未来のいしずえ賞について

■一般財団法人 KODAMA国際教育財団について

<活動理念>

私たちは教育を必要としている青少年に「学び」の機会を提供し、社会の発展に寄与する人材育成の支援をしてまいります。

また、「学び」の可能性を未来へと広げ、社会で実践している人を支援してまいります。

これらの活動を通して健康で豊かな国際社会の実現に貢献いたします。

<ステートメント>

夢と目標を分かち合う。夢を共有することが喜びとなる。目標に向かって共に取り組むことが希望となる。

誰もが「夢と目標」をもてる社会をつくる。それが私たちの願いです。

理事長 児玉圭司
理事 コシノジュンコ、鳥飼重和、岡山慶子
評議員 児玉義則、塩島一郎、関根宏一、中田恭子、中村国善、ディルク・ファウベル
監事 高橋 浩、出口 勝
事務局長 上阪俊司

〒104-0061

東京都中央区銀座5-14-5 光澤堂GINZAビル7階（株）朝日エル内

（第7回未来のいしずえ賞事務局）

TEL:03-5565-1447 FAX:03-5565-4914

E-mail:mirai@kodama-mirai.org



1. 実施概要

KODAMA国際教育財団 第7回(2024年)『未来のいしずえ賞』 授賞者・推薦人

表彰部門	推薦人	受賞者	受賞者プロフィール
① スポーツ部門	児玉 圭司 株式会社 スヴェンソンホールディングス 代表取締役会長	白井 一幸 2023年WBC侍ジャパン ヘッドコーチ	目的と目標を明確に定め、選手の 内在的な力を引き出すことで、WBC 侍ジャパンを世界一に導く。
② 医療部門	高折 晃史 京都大学医学部附属病院 病院長	京都大学医学部附属病院 臓器移植医療部 (代表)波多野悦朗 京都大学医学部附属病院 肝胆膵・移植外科教授	コロナ禍においても移植医療を継 続するだけでなく、コロナ患者に 対する肺植、世界初の血液型不適 合生体肺移植、日本初の脳死肝 小腸同時移植等の先進移植を推進 した。
③ 保健福祉部門	鳥飼 重和 鳥飼総合法律事務所 代表弁護士	山中 光茂 医療法人社団 しろひげファミリー しろひげ在宅診療所 理事長・院長	地域包括ケアの実現に挑戦し、 江戸川区を在宅医療と介護のモデ ル地域にして全国から注目を浴び ている。がんの終末期など重篤患 者さんを1500人以上診察、年間250 人以上のお看取りをしている。
④ 教育部門	岡山 慶子 株式会社朝日エル 会長	奥田 知志 認定NP0法人ほうぼく- 抱樸 理事長/代表、 東八幡キリスト教会牧師	認定NP0法人ほうぼく-抱樸を設立、 生活困窮者への伴走型支援を行う。 福祉と共生の拠点「希望のまちプ ロジェクト」を推進。
⑤ 社会活性化部門	コシノジュンコ デザイナー JUNKO KOSHINO株式会社	小林 庸子 指揮者小林研一郎夫人、 「コバケンとその仲間たち オーケストラ」プロデュ サー	「全ての人が輝いて生きることが できる社会」をめざし、「支え合 い、共に生きる」ことの素晴らし さを体感できる演奏会をプデュ ース。

1. 実施概要

プログラム

13:15	15	ご登壇者ご説明(橘の間)
13:30	30	受付開始 受付後順次 桜の間へご案内
「第7回（2024年）未来のいしずえ賞」 授賞式（桜の間）		
14:00	02	開会 司会進行 岡崎弥生
14:02	06	主催者挨拶 一般財団法人KODAMA国際教育財団 理事長 児玉圭司
14:08	03	主催者挨拶 「未来のいしずえ賞」実行委員会 実行委員長 コシノジュンコ 未来のいしずえ賞、記念品に込めた思い
14:11	03	第7回 2024年 未来のいしずえ賞の審査選考について 実行委員 岡山慶子
14:14	61	受賞者発表と表彰式 <受賞者> ①スポーツ部門 白井 一幸 ②医療部門 京都大学医学部附属病院 臓器移植医療部 ③保健福祉部門 山中 光茂 ④教育部門 奥田 知志 ⑤社会活性化部門 小林 庸子 <授賞式> ①受賞者発表 ②受賞者紹介VTR放映 ③賞状授与（児玉理事長） ④賞金目録授与（児玉理事長） ⑤記念トロフィー授与（コシノ実行委員長） ⑥推薦人による推薦理由 ⑦受賞者ご挨拶  岡崎弥生さん
15:20	03	ご来賓ご挨拶 河村 建夫様（元内閣官房長官・文部科学大臣）
15:23	01	ご来賓ご挨拶（※VTR映像でご出演） 山中 伸弥様（京都大学iPS細胞研究所 名誉所長・教授）
15:24	25	フォトセッション（進行:伊藤由貴） 1. 受賞者（受賞者、理事長、実行委員長） 2. 集合（実行委員、受賞者、推薦人、財団役員） 3. 部門別（実行委員、受賞者、推薦人、ご家族他） ①白井一幸 ②京都大学医学部附属病院臓器移植医療部 ③山中光茂 ④奥田 知志 ⑤小林庸子
15:49	10	ご歓談タイム
15:59	04	閉会ご挨拶 鳥飼重和実行委員
16:03	01	閉会 岡崎弥生
16:04		ご退室

2. 会場の様子

記念品（トロフィー） ・ 表彰状 ・ 賞金目録





※賞のリーフレットより

「未来のいしずえ賞」は、誰も目を向けてこなかった時から、誰も目を向けてこなかった領域で、強い意志をもって活動続け、社会の礎を築いている方の功績を讃える賞です。

見えない努力を讃えるという、まさに日本的な精神性にあふれた賞といえます。

その象徴として、漆が美しい輝きを放つ記念品を考案しました。

日本の伝統工芸である漆は、英語ではジャパン（japan）と表記されます。

世界はそこに日本の心を感じていたにちがいません。

記念品の四角柱のフォルムはまさに人間の合理、築く力です。

それを礎として芽生える緑の若葉。それは言わば、世界を豊かにするために努力を重ねてきた人たちのオリジナルのグリーンです。

今回の受賞を讃えて、受賞者に捧げます。

この賞が、世界に誇れる賞となり、より良い未来へと導いていくための一助となることを願っています。

「未来のいしずえ賞」実行委員会 実行委員長

コシノジュンコ



2. 会場の様子



2. 会場の様子



3. 授賞式

主催者より挨拶

主催者挨拶

KODAMA国際教育財団 理事長 児玉圭司

KODAMA国際教育財団について少しご説明させていただきます。

私は会社経営の傍ら、卓球の道を人生の軸として歩んでまいりました。そして2015年に社長を退任し、第三の人生は世のため人のために何か恩返しがしたいと思い、コシノジュンコさんをはじめ各界で活躍されている評議員の皆さんのご参加を得て、一般財団法人KODAMA国際教育財団を設立いたしました。

この財団では、ラオスの教育支援として、将来ラオスを背負って立つ子どもたちを育成するモデル校としてラオ・ジャパン・スクールを2020年に開校しております。また、2021年より、日本とラオスの外務省の協力のもと、ラオスの栄養環境向上のためのプロジェクトに参画し、活動を行っております。

そして、KODAMA国際教育財団の活動の大きな柱のひとつである、「未来のいしずえ賞」は、未来に向かって豊かな社会の礎を築くために、人知れず地道な努力を重ねている方々の活動はもっと脚光を浴びるべきであり、称賛すべきであると考え、この顕彰制度を立ち上げました。より良い社会へと導くために、強い意志をもって活動されている方々の功績を称える国際賞です。

皆さまの授賞理由につきましては、後ほど推薦人から詳しく説明がございます。

このように各分野で世のため人のために貢献され、懸命に活動されている皆さまを顕彰させていただくことを誇りに思います。

皆さま方のますますのご活躍を
心から祈念申し上げまして開会の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。



未来のいしずえ賞 記念品に込めた思い
コシノジュンコ実行委員長

今年は7回目の授賞式となります。

本当に一人ひとりが見えないところで活躍されて、大変素晴らしいことだと思います。

私は、トロフィーをデザインさせていただきました。テーマは「対極」です。

イメージで言うと、“光と影”ということで、光が当たる素晴らしい活躍の裏にはやはり素晴らしい影があります。未来のために、見えないところで活躍されている皆さまを称えるべくデザインさせていただきました。

今日はどうもありがとうございます。

3. 授賞式

主催者より挨拶

未来のいしずえ賞の審査選考について
岡山 慶子 実行委員

選考の経過について説明させていただきます。

未来のいしずえ賞は、当初5つの部門について顕彰を行ってきました。その後、コロナが蔓延したこともあり、この賞をどういう方々にさしあげればいいのかを検討した時期がありました。その間は、医療に尽くされた方、人々を元気づけてくださった方々への賞にさせていただきました。

そして、今年の7月、やはり元に戻る時期が来ているのではないかとということで、第7回目は5部門において顕彰することに決定いたしました。8月に皆さんから候補者のご推薦をいただき、検討を重ねた結果、11月、今日受賞される5名の方々に決定いたしました。

これまででは外部の方、あるいは近い方に推薦人をお願いしておりましたけれども、今回は各理事から推薦をさせていただき、これまで実行委員を務めていただいた山中伸弥先生のご意向も伺いつつ、決定させていただきました。

本日は、こうして元の形に戻れたことを、皆さんとご一緒に祝いつつ、表彰式を行いたいと思っております。



白井 一幸

2023年WBC侍ジャパンヘッドコーチ

このような素晴らしい賞をいただき、本当に光栄に思います。

今回、受賞できたのは、なんといっても昨年のWBCにおける侍ジャパンの優勝であり、この優勝は多くの皆さまに感動をお届けできたと思っています。なぜ侍ジャパンが優勝し、多くの皆さまに感動をお届けできたのか。これまでの国際大会の戦い方というのは、目を吊り上げ、口を真一文字に結び、命がけで戦うといった雰囲気があったのではないかと思います。今回の侍ジャパンは笑顔があふれ、みんながのびのび楽しくプレーしていたというのが印象に残ったのではないのでしょうか。本来のスポーツが持つ明るさ、楽しさを最大限に表現できたのが侍ジャパンであったと思います。

あのメキシコ戦は皆さんも大変心配されたのではないのでしょうか。ああいう窮地になると、悲壮感が漂うのが従来のスポーツでした。けれども、あの9回、1点差がついた場面で、大谷翔平選手はベンチの中で「ねえ、みんな、そんな簡単に世界一になったら、面白くないよね。こういうことがあるから、世界一って価値があるんだよ。これから俺が塁に出てくるから、あとはみんな任せたよ」といって2塁打を打ってセカンドベース上でチームメイトを鼓舞したのです。まさに、これからのスポーツのあり方を示すことができたのではないかと思います。これからも大谷選手のような素晴らしいアスリートがたくさん育つように、私もスポーツ界に貢献していこうと思っています。

今後とも皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。



推薦人●児玉 圭司（株式会社スヴェンソンホールディングス代表取締役会長）

2023年3月22日、日本中が熱い歓声に包まれ、WBC第5回大会決勝で「侍ジャパン」がアメリカとの死闘を見事に制し、14年ぶりの優勝を決めました。大谷翔平選手やダルビッシュ有選手などのメジャーリーガーを筆頭に「史上最強」と言われたチームが、その実力を世界に示しました。栗山英樹監督を支え、この最強チームを導いたのが、ヘッドコーチの白井一幸さんです。

白井さんは1983年のドラフト1位で日本ハムに入団し、走攻守3拍子そろった内野手として活躍され、現役引退後、日本ハムの二軍総合コーチ、二軍監督を経て、2003年から一軍ヘッドコーチを務め、リーグ優勝2回、日本一1回を獲得。

その後、DeNAでもコーチなどを務め、2014年から再び日本ハムのコーチになり、同い年の栗山監督を支えました。指導者としての白井さんは、「可能性を開く鍵は意識の持ち方と行動力」をモットーに、コーチングを取り入れた指導で、次々と優秀な若手選手を育成されています。侍ジャパンでは「何がなんでも世界一になる」という目標と「野球を通して多くの人に元気や勇気や感動を与える」という目的を明確にすることで、選手の自発的な行動を促し、見事勝利へと導きました。

その功績は、本賞に誠にふさわしく、ここに推薦させていただきます。

京都大学医学部附属病院 臓器移植医療部

京都大学医学部附属病院 肝胆膵・移植外科／小児外科 臓器移植医療部を担当しております波多野 悦朗と申します。臓器移植医療部を代表してご挨拶を申し上げます。

このたびはこのような賞をいただき、本当にありがとうございます。

手前味噌ですが、生体肝移植という治療が始まったのは1989年、今から35年も前です。本邦で2例目の症例が京都大学で行われ、昨年には2千例を超える症例を経験させていただいております。当初、移植がなかなか上手く行かない患者さんがおられたときには、我々の先輩方は、もうこのプログラムを継続するのをやめようかと弱気な気持ちにもなっていたと聞いております。

しかしながら、強い意志をもってこのプログラムを継続することによって、その後、日本、世界から多くの医師たちが京大に見学に来て、生体肝移植という治療が世界に広まっています。今や肝臓のみならず、肺移植、腎移植が行われています。先週も、肝臓、肺、腎臓の移植が一度に行われました。そういうことができるのも、看護師をはじめいろいろな人の努力と貢献があるからです。何よりコーディネーターの力が大きいです。命をつなぐことにおいて、コーディネーターは、我々医師よりももっともっと大きな仕事をしておられます。本当に大事なのに、なかなか陽の目の当たらない、縁の下の力持ちです。

今回そうしたことも含めて、未来のいしずえ賞という非常に価値ある賞をいただけたことに本当に感謝申し上げます。



推薦人●高折 晃史（京都大学医学部附属病院 病院長）

皆さん、移植医療にどのようなイメージをお持ちでしょうか。臓器を移植する手術の前にはドナーさんとのコーディネート、手術後は免疫抑制剤を飲む長い期間、外来での術後管理の期間が続きます。決して手術だけでは終わるのではなく、その前後には非常に多くの人が関わっています。究極のチーム医療によって移植医療が成り立っています。

京都大学附属病院臓器移植医療部は、肝胆膵・移植外科、呼吸器外科、泌尿器科、消化器内科、糖尿病・内分泌栄養内科、病理診断科の医師、そして看護チーム、コーディネーターが関わって、チームを形成しています。

そして、日本における移植医療を常にリードしてきました。何十年も前から日本に移植医療を持ち込もうとやってきて、今や日本随一の症例件数を誇ります。それでも、まだ移植医療で助けられない人もいます。ですから、より多くの人に移植をして助けるために、命のリレーが今後も続いていきます。

このような未来に続いていく挑戦が、まさに未来のいしずえ賞にふさわしいと、推薦させていただきました。本当におめでとうございます。

山中 光茂

医療法人社団しろひげファミリー しろひげ在宅診療所 理事長・院長

在宅診療はまだまだなじみがない分野だと思うのですが、昨年私たちのクリニックでは250人の方の看取りをいたしました。今、引きこもりや重度精神疾患の方を100人ほど診ていて、約1500人の患者さんのほとんどが重症度の高い方、難病の方で、人工呼吸器をつけているなど、なかなか病院に行くことができない方々を24時間365日診ています。スタッフが180人ほどいますが、すべてが常勤の医師・看護師で、ブラック企業と言われても仕方がないくらい、みんな一生懸命頑張っています。

救急搬送して病院にお任せしてしまえば簡単なのかもしれないのですが、家で最後の時間を過ごしたい。亡くなる1週間前に「お花畑に行きたい」という患者さんのサポートをさせていただいたり、難病の方と一緒にヴェトナムに行かせていただいたり、そういう活動もしています。

昨日、一昨日と、輪島市と珠洲市に行ってきました。私たちは日頃、日常でも苦しい事もあれば楽しい事もありますけれど、日常の楽しさ、苦しさ、哀しみさえも当たり前で過ごせない状況がまだ被災地にはあり、そこへも関わらせていただきたいと思う一方で、日々の当たり前の幸せを、家で、家でなくてもいいのですが、支えていける。未来に対しても大事なのですが、今やるべきことをやることを限られた人生の中で、責任をもって関わっていければと思います。

当たり前のことを地道に日々過ごし、そして当たり前の生活ができない方が、被災地でなくてもいる現実がある中で、そういうところに寄り添っていく活動が、自分のできる範囲、無理のない範囲でしていければと思っています。

このような賞をいただき、この賞に恥じないような日々、一瞬一瞬を過ごさせていただければと思っています。

本日はありがとうございます。



推薦人●鳥飼 重和（鳥飼総合法律事務所代表弁護士）

山中さんは、外交官になろうと慶應の法学部に入って、上級試験を受け、将来はどこかの大使になっていたはずなのに、外交官にはならず、エイズ対策のために医師になってアフリカに行かれてしまった。帰国した後は、東京の下町で在宅医療を始め、医師や看護師をたくさん雇って、看取りまで行っています。やることが非常に素晴らしくて、未来への発想が非常に鋭い。

今日を受賞者の方はみんなそうですけど、現在ではなく、未来を見据えて、未来のために、今ある障害を乗り越える。そういう発想で、在宅医療にも、デジタルを活用されておられる。本当に未来への希望が期待できる、そんな活動をされています。

今日はどうもおめでとうございます。

3. 授賞式

第7回（2024年）未来のいしずえ賞 【教育部門】

奥田 知志
認定NPO法人ほうぼく-抱樸 理事長・代表
東八幡キリスト教会牧師

本日はどうもありがとうございます。とっても恐縮しております。
というのは、当然ひとりで行ってきたわけではなく、たくさんの人たちの支えがあり、なによりも私が出会ったホームレス状態の方々や行き場のない若者たちが、みずから頑張った結果でありまして、今日はみんなにいただくという思いで受賞させていただきました。

私は人の生きづらさとは何かということを40年近く考えてきました。それは、「経済的な困窮」のみならず「社会的な孤立」です。ホームレス状態の方は、路上にいるときは「雪の上で死にたい」とおっしゃるのですが、アパートに入居して「これで安心ですね」と言うと、「俺の最後は誰が看取ってくれるか」とおっしゃるのです。

私たちはまさに出会いから看取りまでという範疇で人と関わるということを続けています。幸い私は牧師なのでお葬式までできますし、教会に納骨堂にすべての方々のお骨を預かっているという状態です。

この「社会的な孤立」を教えてくれたのは、ある事件です。
今から30数年前に、中学生が夜間にホームレスを襲撃するという酷い事件が北九州で起こりました。その被害者の男性が「一日も早くやめてほしい。でも、考えてみたら、夜中の1～2時にホームレスを襲いに来ている中学生というのは、家があっても帰る場所がない、誰からも心配されていない。そういうやつの気持ちか、俺はホームレスだからわかる」とおっしゃった。私には中学生とホームレスはまったく違うように見えていましたが、両者に共通する孤立、孤独、「ホームがない」ということを抱えた人間の悲しさに気づかされた事件でした。

今、「希望のまち」をつくらうとしています。暴力団事務所があった「怖いまち」と言われてきた北九州を希望のまちに変えるプロジェクトであります。二度と行き場のない若者が暴力団に身を寄せることのない、けっして未来のある若者たちをそういう場所には行かせない、ここに来たらいい、ここに来たらなんとかなる、そんなまちを今つくらうとしています。社会復帰、とよく我々の分野で言われますが、私は40年近く「復帰したい社会か」と問うてまいりました。

この賞をいただいて、また元気をいただきましたので、これからあるべき社会を求めていきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。これからも頑張りますので、応援をよろしくお願いいたします。



3. 授賞式

第7回（2024年）未来のいしずえ賞 【教育部門】

推薦人●岡山 慶子（株式会社朝日エル会長）

奥田さんは牧師でいらっしゃいます。学生時代から始めたホームレス支援をはじめ困難を抱えた人に寄り添う活動をされてきました。これまでに4000人近くのホームレスの人々の自立を支援されました。

その活動の中で次々と支援の本質やニーズを発見し、目の前にいる人々のための支援事業を立ち上げられました。とくに、コロナ禍においては困難な人はどういう状況におられるのかということをお天皇・皇后陛下に説明され、NHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」をはじめたくさんのメディアに取り上げられてもいます。

そして、今までの実りの集大成として、あるいは途上かもしれませんが、「希望のまち」を北九州につくられています。それも特定指定暴力団跡地という「怖いまち」から「幸せのまち」へ。

「希望のまち」に至るまでには、先生の多くのお言葉が反映されていると思いますので、それをご紹介したいと思います。

「助けて」といえる社会

ひとりにしない支援／私がいる あなたがいる なんとかなる／あなたが自分をあきらめても、私たちはあなたのことをあきらめない／大丈夫と思える場合は、この社会にかならずある／絆を失った人たちのホームに、私たちはなる／だれもひとりでは生きていけない。自信をもってそう言える／家族の機能を社会化する／歳をとってもなくなならないもの、それは人のつながりである／生きていけば、いつか笑える時がある

このような言葉が実現する「希望のまち」がまもなくスタートします。

最後に、なぜ奥田さんを、教育部門にご推薦したかを簡単に申し上げます。

今、世界には大変な憎しみがかり、戦争がありますけれども、奥田さんは戦争を可能にする要素には「貧しさ」と「寂しさ」、そして、「学びのなさ」があると指摘されています。その結果、言葉で自分の悲しみや辛さを表現できないことが社会のいろいろな問題をつくっている。だから学びは大切、というメッセージを発信されています。そのことに、私は深く共感いたしました。

学びは学校教育ではなく、今日、受賞者の方々が発言されたように、いろいろなところに学びの場はあります。奥田さんはそのように学びの場をたくさんおつくりになっておられます。そのことに私たちは強く共感し、敢えて教育部門として受賞していただくことを決めました。

そして、奥田さんをずっと支えていらっしゃる伴子さんにも推薦の言葉を差し上げたいと思っております。

本日はどうもおめでとうございます。



小林 庸子
指揮者小林研一郎夫人
「コバケンとその仲間たちオーケストラ」プロデューサー

WBCがどうしてあんなに私たちに感動を与えてくれたか。野球を知らない人までが、すごい感動をいただきました。それは野球だから、じゃないですね。野球を超えた人生を、野球を通して見たことによって、あんなに大きな感動をいただきました。

私たちも、音楽ではなく、音楽を通して、音楽の向こうにある人生を皆さんに伝えたいと思います。2005年3月からこの活動をしております。このオーケストラには、現在6名の障がい者の方がいらっしゃいます。目が見えませんか、指揮も見ることができません。楽譜も見えません。どうやって支えていくかと言うと、周りの人が譜面を録音に落としたり、「もうすぐ吹く番よ」と合図をして、オーケストラが成り立っています。障がいがあっても、誰かがちょっと助けてくれれば、できることをしてくれれば、その人の夢は叶えられます。

すべての人が与えられた命を輝いて生きることができる共生社会を、オーケストラというステージから具現化して皆さまにご覧いただければと思っております。

そして、今日は、私たちのオーケストラを20年間牽引してくださった主席ヴァイオリニスト、コンサートミストレスの瀬崎明日香さんが来てくれました。それから、コバケンも。主人としては全然ダメなんですけれども、音楽家としては宇宙一だと思っております。本当に、コバケンワールドに対する信頼があるから、この活動ができています。そして、息子の佑磨は裏方として、ステージ裏で椅子を並べたり、お弁当を出したりしてくれています。どうもありがとう。

私は小林庸子と申しまして、「庸」は中庸の庸です。モデラート、ニュートラルという意味だと思います。親はそれを希望してつけたのだと思いますが、私はブルドーザーのような性格で、今まで20年間色々なことを薙ぎ倒してやってきたので、迷惑をおかけした方もいると思います。この場を借りてお詫び申し上げます。

では、私の話はこのぐらいにして、コンサートミストレスの瀬崎明日香さんの演奏をお聴きいただければと思います。

推薦人 ● コシノジュンコ（デザイナー JUNKO KOSHINO株式会社）

社会に希望を与えるものは、芸術、文化、スポーツとたくさんありますけれども、その中でも夢を与えるのが音楽です。今日はコバケンの愛称で知られる指揮者の・小林研一郎さんがいらしてくださいました。

コバケンさんとは2011年3月11日の震災の時にお会いしまして、指揮者としても大変有名ですけれども、社会貢献活動にも熱心に取り組んでおられます。そういう活動はやはりひとりではできません。奥様である小林庸子さんの支えがあってのことだと思います。お二人が一体となって皆さんに夢を与えているのだと思います。

未来へとつながる若い音楽家のためにも、ご夫妻で活躍されております。今日は本当におめでとうございます。



3. 授賞式

第7回 (2024年)未来のいしずえ賞 【社会活性化部門】



瀬崎 明日香さん
「コバケンとその仲間たちオーケストラ」コン
サートミストレス (首席バイオリン)

小林 研一郎さん



実行委員
受賞者



財団役員
受賞者・推薦人・実行委員



白井 一幸さん
実行委員・推薦人
ご招待者



京都大学医学部附属病院
臓器移植医療部
実行委員・推薦人・来賓河村建夫氏



山中 光茂さん
実行委員・推薦人
ご招待者



奥田 知志さん
実行委員・推薦人
ご招待者



小林 庸子さん
実行委員・推薦人
ご招待者

来賓挨拶

河村建夫様 元内閣官房長官、元文部科学大臣

第7回未来のいしずえ賞授賞式は、最後のヴァイオリンで本当に盛り上がりました。コバケンさんの指揮者の顔がちょっとだけ見えたことにも感動いたしました。私もコバケンさんのコンサートには何度も足を運んだ、コバケンファンのひとりでございます。今日このような形で会えできたことに感激いたしております。

今日、未来のいしずえ賞を受賞された方々は、それぞれまさに選びに選ばれた感じがいたしました。野球の白井さんの映像を見ながら、いずれ大谷選手のお父さんお母さんもこの席にお呼びすることになるのではないかと想像もしました。素晴らしいコーチとこうしてお会いできて大変嬉しく思います。

また、京大の臓器移植医療部の皆さまには大変頑張ってください、私も議員時代に臓器移植法の成立および改正案のお手伝いをさせていただいたものですから、こういう形でお祝いさせていただくことを大変嬉しく思っております。これからも移植医療はどんどん進んでいくと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど鳥飼先生が「変人」だとおっしゃった山中先生は、プロフィールを拝見すると、全国最年少の市長さんとして2期お務めになったという経歴を見て感心いたしました。この経歴を生かして社会のために貢献され、まさに未来のいしずえ賞にふさわしい方だと嬉しく思っております。

教育部門で受賞された奥田さん、私も文科相に就任させていただいた時に、役所の皆さんに「ここに教育現場はないよ。教育現場は全国にあることを忘れないでほしい」と言いました。「希望のまち」がこれから学びの場となりますように祈念いたします。

最後に先ほどヴァイオリンで盛り上げていただきました小林庸子さん、コバケンさんの活躍の側に庸子さんがおられることがよくわかりました。ありがとうございました。

今日、こういう形で皆さんと共に素晴らしい方々をお祝いできることを本当に嬉しく、光栄に思います。これからも皆さま方のますますのご活躍と、今日お集まりいただいた皆さま方のご健勝を祈り、来年も素晴らしい方々が選ばれていくことを期待しながら、児玉さんのますますのご健勝を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

今日は本当にありがとうございます。



ご挨拶

山中 伸弥様 (※VTR映像でご出演)

(京都大学iPS細胞研究所所長・教授、公益財団法人iPS細胞研究財団理事長)

京都大学iPS細胞研究所の山中伸弥です。

第7回未来のいしずえ賞の授賞式が盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

今回授賞された皆さまには心からお祝いを申し上げますと共に、これまでのご尽力に対し深く敬意を表します。

皆さまはそれぞれの分野でより良い未来に向けて努力を重ね、挑戦されていると思います。
私も引き続き未来に向かってご尽力されている方々を精一杯応援していきたいと思っています。

このたびは誠におめでとうございます。





3. 授賞式

ご歓談タイム



締め言葉

鳥飼 重和 「未来のいしずえ賞」 実行委員

今まで7回この会に出席していますが、今までの中で一番楽しい会でした。

私は弁護士で、弁護士というのは、裁判官や検察官同様、現在の法律、あるいは過去の判例をもとに判断をします。言わば時計が止まったまま、未来のまったくない世界で生きているのですが、今日は未来を見せていただきました。ヴァイオリンの演奏と指揮も、心が沸き立つ素晴らしい思い出をつくっていただきました。

今日ご出席の皆さまには、ぜひさらなる未来をつくっていただくことを期待して、さらなるご活躍をお願いいたします。

最後に、この会をつくった児玉理事長とコシノジュンコさんのお二人に敬意を表し、盛大な拍手をお願いして終わりにしたいと思います

